

## 「希望を抱く捕われ人よ、砦に帰れ」

(マタイによる福音書第 11 章 25-30 節)

軛はもともと家畜の首にかける曲がった木材のことです。それに荷台を付け、家畜は荷物を運びます。そこから、奴隷としての奉仕や服従の象徴、抑圧のシンボルとなりました。

マタイによる福音書が記された当時のイスラエルは、ユダヤ戦争で敗北し、神殿を破壊されてしまいました。その苦境にあってユダヤ人は神に立ち返るべく、ファリサイ派を中心に律法を文字通り厳格に守る、律法主義的傾向を強め、民族の再興を図りました。しかし現実には、律法を文字通り守ることができない人や、秩序から外れる人は排除されてしまいました。人々は律法による軛を負わされていたのです。律法主義の中、完全を求められる軛です。人々はその軛に繋がれ、重荷を負い、疲れ果てていました。彼らが人々に負わせた「軛」は、神に立ち返るどころか、神と人とを分断し、むしろ圧迫となってしまったのです。主イエスはこのような重荷を負わされて疲れ果てた人々に、「わたしの軛を負い、わたしに学びなさい」と招かれました。

今日のゼカリヤ書の言葉を借りれば、当時の人々に限らず、人間は「砦」に捕われています。人間は、パウロの言葉のごとく「善をなそうと思う自分には、いつも悪がつきまとっているという法則に」支配され、どうしたって神から離れてしまうからです。神に立ち返ろうとしたファリサイ派の人々が、かえって神の思いから離れてしまったように、です。そこから自力で抜け出すことなどできないのです。主イエスは自らを「「柔和で謙遜な者」と言われます。それは、幼子のように神の憐れみに信頼し、自らの強さを誇らない者のことです。この主イエスが示された生き方の中にこそ、安らぎがあります。「わたしの軛は負いやすく、わたしの荷は軽い」と言われる主イエスが共に軛を負ってくださるから、わたしたちは「砦」に捕われながらも、「希望を抱く捕われ人よ、砦に帰れ」とのゼカリヤの言葉の通り、希望が与えられます。幼子のごとく神に信頼し、委ねておられる主イエスが共に軛を負ってくださるからこそ、わたしたちは「悪がつきまとっているという法則」から解放され、幼子のごとく神に信頼しつつ歩むことができます。

まだまだ不安な日々が続きます。砦のなかにいる如く、先がみえません。しかし、主イエスが共におられ、わたしたち一人ひとりの軛を共に負ってくださっています。わたしたちは砦の中に捕われて生き続けるのですが、主イエスが共に軛を負ってくださるから、わたしたちの歩みは、主が助けてくださる、恵み溢れる歩みへと変えられます。だから、わたしたちにはいつも希望があります。